

てこな・ミュージック・ジャーナル

超絶技巧に酔いしれて

自分にはできないけれども、妖しげなほどの演奏技量を味わいたくなる。今回はそのようなピアノによる超絶技巧の作品をいくつかご紹介いたします。



アレクサンドル・スクリャーピン

筆頭はアレクサンドル・スクリャーピン(1872~1915)に登場してもらいましょう。演奏が難しすぎて指が鍵盤の上で止まってしまう作品と言えば、スクリャーピンの名が挙がるのではないのでしょうか。どの曲も演奏家泣かせの難しさにあふれますが、でも感動的な作品が本当に多いので、その中からく幻想曲 口短調 op.6-3>をご紹介しましょう。16歳でモスクワ音楽院に入学。あまりに熱心にピアノに向かったため、右手を痛めてしまいました。すると左手の練習に励み、そのおかげで一層複雑な曲想を表現できるようになり、28歳で完成したく幻想曲>は、左右両手が同じように豊かな音響を競い合い、複雑に絡み合います。ピアノ1台とは思えないほど、声部構成が錯綜としていて、凝った楽器編成が聞こえてくるかのような壮大な音楽。途切れることなく次々に華やかな音響を繰り出す雰囲気は、あたかも同時代のクリムの絵画のようで、簡素さには程遠い音楽、マーラーの時代となっていることを思い起こさせます。それは崩壊を前にした飽和状態、待ち受ける退廃、あるいは危うい歪曲といった言葉と紙一重の絢爛さに通じ、「尋常ならざる美」というような表現を使いたくなるほどの音楽、最後まで息つく間もない情熱で、聴き手の心を奪ってしまいます。



マヌエル・デ・ファリャ

次は、まさに情熱の国スペインのファリャの作品です。マヌエル・デ・ファリャ(1876~1946)は学校音楽の教科書で、バレエ音楽<三角帽子>の作曲家として紹介されています。同じような色彩とリズムにあふれているのが、くアンダルシア幻想曲>です。密集する音のさまざまな塊で曲は始まり、それらが鍵盤上を明確なリズムとともに移動します。フラメンコの足踏みリズムと官能的な腕の動き、濃淡に富む色彩が熱い風の中にゆらゆらと、ピアノの名手ならではの表現力が求められる情緒豊かな作品です。

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子



モーリス・ラヴェル

モーリス・ラヴェル(1875~1937)の<ラ・ヴァルス>も難曲を得意とする演奏家のレパートリーに挙げられます。もとは管弦楽によるバレエ音楽でしたが、ピアノ2台用、そして独奏用編曲があります。世紀末のパリの華やかさのようで、どこか寂しさも漂わせる音響が印象的です。低音が規則正しくリズムを刻み、そこに不協和音を響かせ、不可思議な不気味さ。いびつなワルツに相応しく耳にざわざわとする響きが聞こえ、あたかも渦まわくようなエネルギー。水面の波紋のように広がる思わせぶりな曲想は美しく、しばしワルツらしい落ち着きも聞かせます。しかしまた混沌に戻ると、和音を打ち、勢いよく音をかき鳴らす。この作品の詩情には独特の強烈さがあり、それは20世紀初頭、世界が戦争に巻き込まれるという不安感に苛まれながらも芸術が成熟し、やがて破滅の時代になることを予感させます。このように豊穡な音楽は超絶技巧の演奏家だけに可能で、聴き手は渦中に巻き込まれていくかのような感動を味わうのです。



ミレイ・バラキレフ

さてもう1人、ロシアの超絶技巧者を最後にご紹介しましょう。色彩の音楽家ミレイ・バラキレフ(1837~1910)です。バラキレフが、ロシアの民俗音楽イスラメイとタタール人の歌を主題にして1869年に完成した幻想曲がくイスラメイ>です。スタッカートで軽快に始まりますが、スピードを緩めることなく音を重ねながら流麗な響きで、聴き手の耳を奪います。演奏が困難な作品の代表にあげられるのは、和音が激しく動き、決して音は濁ることない、透明感が求められるからでしょう。その清澄さの中から穏やかな歌を主題とする中間部分は、美しい情緒を聞かせます。後半では前半のリズムを取り戻し、華やかさを増しながら、和声的にも複雑になり、豪華絢爛な曲想となっていきます。異国情緒たっぷりの民族的音調は流麗さを増し、技巧はさらに駆使され、スピードを上げながらクライマックスを迎え、圧倒的な最後となります。

技巧の披露で聴衆を引きつけようとする作品は、いつの時代にも、そしてどの楽器にもあります。でも今回ご紹介したような作品は、永遠に人々を魅了させる何かがしっかりと編みこまれているので、心の奥底からの感動となるのでしょうか。それがどのようなものであるかをお知りになりたい方は、ぜひお聞きになってみてください。ここに並べた作品をレパートリーとするような演奏家のコンサートを、近い将来、ぜひ実現したいですね。

(資料：新訂 標準音楽辞典/音楽之友社)